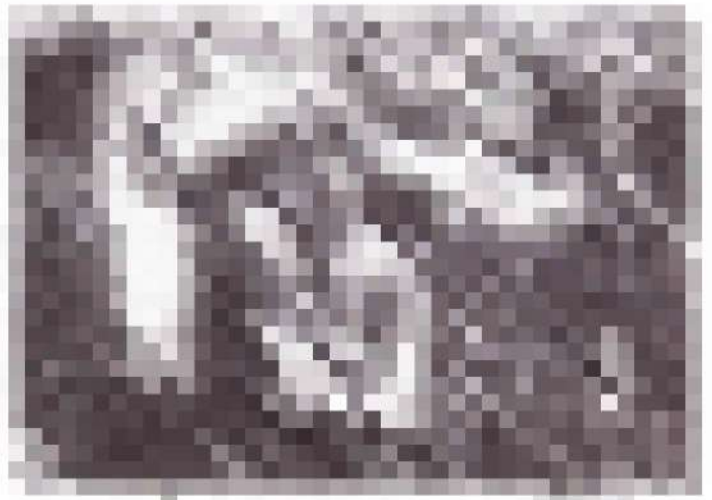


は、役デビューとは思えない落ち着いた歌唱で、イタリア的なアイダではないが、上から下まで安定した声量は、アイダにしては細身の舞台姿も手伝って、現在最良のアイダの1人と言えるのではないかと。

アムネリスのルチアーナ・ティンティエーノは、胸声に頼り過ぎて表現が荒くなる部分もあったが、高音まで素晴らしい声を聴かせてくれた。暗い声、母国語なのに発音の不明瞭なイタリア語が彼女をイタリア的なアムネリスから多少遠ざけていた。

アモナスロのファン・ボンス、ランフィスのマッティ・サルミネンも声量では負けない。

舞台設定をヴェルディの時代に置き換え、ロココな衣装や兵服が違和感を与えたが、音楽にビタリとはまった振り付けのバレエといい、声の饗宴といい、豪華な《アイダ》であった。(中 東生)



オペラ チューリヒ歌劇場
《アイダ》プレミエ

故ヴィオッティの代わりを引き受けたアダム・フィッシャーのチューリヒ歌劇場での《アイダ》は、細部まで大切に鳴らす音楽作りで大変興味深く、ハンガリーの血が、イタリア・オペラの熱い音楽に十分なパッションを表現させていたが、それでも、全体的に交響曲を聴いているかのように、ヴェルディらしい演奏ではなかった(5月28日)。

今回特筆すべきは歌手陣の充実した声量であろう。唯一イタリア的だったサルヴァトーレ・リチートラは、荒削りなテクニックがゆっくりだが洗練されつつあり、最終幕では、涙さえ誘うほど、繊細な感情表現ができるようになってきている。高音も、パッと口を開いて、劇場内の共鳴を味方につけ、輝かしい声を聴かせてくれた。

アイダ役のニーナ・シュテンメ

